



今に伝わる神話のラブロマンス

～大国主命（おおくにぬしのみこと）と八上姫（やかみひめ）～

古代、因幡の国に八上姫という美しいお姫さまがいました。八上姫の噂は神々の里出雲にも聞こえ、大国主命の大勢の兄弟である八十神（やそがみ）たちは、自分こそがこの美しい姫をめとろうと、おとなしい大国主命に自分たちの荷物をすべて持たせて求婚に出かけます。心のやさしい大国主命は、それらの荷物を白い大きな袋に入れ、肩にかけて背負い、後ろをついて歩いていきました。

あるとき、八十神たちが因幡の気多（けた）の岬を通りかかると、毛をむしられ皮をむかれて痛くて泣いているうさぎを見つけました。うさぎは、自分の住む隠岐の島から本土に渡るためにワニ（※サメ）をだました罰で、皮をむかれてしまったのです。

それを見た八十神たちは、面白がってうさぎに「塩水につかり、陽にあたり風に吹かれて乾かすと治る」と言いました。そのとおりにすると、治るところかますます痛みが増すばかりでした。実はこれは大嘘でうさぎはからかわれたのです。

うさぎが泣き悲しんでおりますと、遅れてやってきた大国主命がそれを見て、「真水で体を洗い、ガマの穂を敷いてくるまればよい」と教えてやりました。教えられたとおりにすると、みるみるきれいな白いうさぎになりました。

白うさぎはとても喜んで、大国主命と八上姫が結ばれる、と予言してどこかに消えていきました。



やがて、八十神たちは次々に八上姫に求婚しましたが、ことごとく断られてしまいました。八上姫の横にはあの白うさぎがいました。

またまた最後に遅れてやってきたのは大国主命です。大国主命を見た八上姫は、「私が望むお方は、賢くて、心の優しい大国主命さま、あなたです！」と申されました。姫は、白うさぎから気多の岬での出来事を聞いていたのです。

やがて、二人は結婚の約束をし、それを聞いた白うさぎや村人たちはたいそう喜び、心から祝福しました。しばらくの間、稲羽（いなば）の八上郡（やかみごおり）で幸福な日々をすごした後、一足先に出雲へ向かった大国主命は、兄の八十神たちを退治し、その後出雲の国造りが始まるのです。